

政策対話（健康福祉部）の概要

1 テーマ

「共生社会づくり」について

2 実施概要

(1) 日時

令和元年9月1日（日）13時30分～16時15分

(2) 場所

県立長野図書館3階 信州・学び創造ラボ

(3) 参加者

23名（障がい当事者（聴覚障がい、車いすユーザー他）、当事者家族、支援者、施設職員 等）
県側：健康福祉部長、衛生技監、健康福祉政策課長、障がい者支援課長、保健・疾病対策課長、
次世代サポート課、特別支援教育課 他、関係課職員

コーディネーター：福岡 寿氏（前 長野県自立支援協議会 会長）

ゲストスピーチ：高山 さや佳氏（NPO 法人 Happy Spot Club 代表）

※ 県民との対話に先立ち、「ポッチャ」体験を通じたアイスブレイクを実施

3 対話での意見（概要）

区分	意見
障がいのある方との交流について	<ul style="list-style-type: none">・地域には様々な意欲ある方々がいるが、それらを繋いでコーディネートする人の存在が重要。また、SNSを活用して情報発信を続けることが効果的。・障がいのある児童を分けるのではなく、小さい頃から自然な形で交流していくことが、障がい理解には重要。障がい者の地域生活移行も同様で、障がい者も高齢者も当たり前と一緒に暮らす、ごちゃまぜの社会がいい。・障がいのある人とない人を区別することが壁を作っている。・障がいに対する理解があり、安心できる場所があればよい。・一緒にできる環境・経験が大切。お互いの良さを理解する。・養護学校と地域社会との交流が少なく、地域社会とのつながりがないまま卒業。・障がいのある方が外に出ることにより、関わる機会につながる。・一緒に居ることで学ぶこともある。「交流」ではなく、「一緒にいる場」を。・偏見ではなく、「違い」を認め、「個性」を認める。・普段から障がいのある方を見慣れると違和感がなくなる。・障がい者が参加しやすい行事がもっと地域に増えると嬉しい。・聞こうとしてくれる人がいれば、コミュニケーションができるようになる。・いろいろ用意され過ぎると逆に困る。・小さい頃から地域の人に知ってもらおう。・誰でも自分が発揮できる場所が大切。・周囲が変われば「障がい」という壁がなくなる。・エレベーターや多目的トイレなど、バリアフリーのための設備は充実してきたが、当事者目線が欠けていて、ちょっとした配慮が足りず、使いにくいことがあり残念。

<p>自分が明日からできること (やれること)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・できない事を受け入れる。 ・特別扱いはしないこと。 ・当事者や経験者の話を聞ける場に参加する。 ・障がい者との交流イベントがあることを発信していくことが大切(SNS等)。 ・ICTを活用しながら障がいにも興味を持ってもらいたい。 ・相手を否定せず、まずは受け入れる。 ・当事者の意見をもっと聞く機会を増やしていくべき。 ・先入観を持たず意見を聞く。 ・「いろいろな人がいて当たり前」との思いを伝える。 ・相談できる場所、交流できる場所をつくっていく。 ・行政も、関係者や団体などにもっと頼ってほしい。相談されれば、何とかしたいという意欲のある人は必ずいる。
<p>参加者からのアンケート意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・こういった話し合いの場があって、県の職員の方とか少し近く感じる事ができてとてもよかった。 ・もっとたくさん今日のような場が広がると当事者の事が理解されるのではないかと思います。 ・失敗してもいいので、社会の中で少しずつ行動していければと考えています。 ・ポッチャの体験は初めてだったので楽しかった。 ・障がい児・者との交流については、小さいうちに交流があればその人個人として理解していけるのではないかと。 ・自分ができることをオープンに地域で積んでいきたいなと思います。 ・福祉は特別な事ではなく、身近な思いやり、相手を想像した対応、声を上げて伝えてくれた事、小さな事でも断らない、そんな思いで終わることができました。 ・明日から何をやれるか、自分のできる事は大きな一歩は出さなくても小さな一歩を継続していく事が大事だと感じました。 ・ぼんやりしていた「共生」について、深く考えるきっかけになって良かったです。